

鷗外・『意地』論考

山崎一穎

はじめに

人は誰でも生涯に幾度か△嵐▽を経験する。その時、疾風怒号の猛威の中で何を発見し、何を認識するのか。そして、どう身を処するのか。

△嵐▽の雄叫びの中で、赤裸々な姿を晒し、その人の真面目が問われる事は言うまでもない。鷗外その人もまた、内心の劇と呼ぶ△嵐▽に何度か遭遇している。惜別と陰鬱な心情を抱いて、ベルリンから帰国する明治二十一年七月、憤懣と傷心の思いで小倉へ旅立った明治三十二年六月、そして、本論で考察しようとしている明治四十五年七月もまた△嵐▽の日であった。

(一) 歴史小説創定の経緯

明治四十五年七月の鷗外日記を展望すると、

△七月一日▽

進級令問題に関する意見行はれざることとなりしにより、次官に請

鷗外・『意地』論考

罷す。夜賀古鶴所来話す。矢嶋柳三郎が予の進退の事を告げしによりてなり。

△七月二日▽

予の進退の事を告げに、賀古椿山荘へ往く。放衛後賀古を訪ひて謝す。

△七月三日▽

岡次官来局して椿山公と田中少将義一との対話の事を言ふ。椿山公賀古を召して予の進退の事を言ふ。放衛後再び賀古を訪ひて、椿山公の話をつへ聞く。

△七月二十日▽

退衛後聖上御不豫の事を承る。

△七月二十一日▽

夜牛込なる賀古の新宅にて常磐会あり。

△七月二十二日▽

上原大臣局長を集へて聖上御不豫に関する訓示をなす。

一見ただけで、重層的な精神構造に驚嘆せざるを得ない。特に大正元年九月は、即物的合理主義の立場からする徹底的な権威否定を主調とし、デモニシユな山口節蔵をして国家政変をテーマに小説を構想する『灰燼』が連載され、乃木殉死を背景に『興津弥五右衛門の遺書』が執筆され、更に、ポウの『Der Teufel im Glockenstuhl』を『十三時』と題して翻訳している。この作品も外的侵入による楽園の崩壊が鋭い社会諷刺となつてゐる。この複雑なる精神状況について、かつて論じたことがあるので重複を避けた。 (注2)

鷗外の歴史小説第一作『興津弥五右衛門の遺書』は、乃木殉死を背景に考えられなければならない。明治天皇の崩御の後、殉死が論じられる風潮に対して、『東京朝日新聞』は『殉死の弊風』(大正元年八月十日付)と題して、「愚なる風習」「帝国の恥辱」「蛮風」という語を以て批判をしている。そういう世情の中で乃木は死を選んだ。乃木殉死に関して、十六日午後まで遺書の発表が憲兵隊によって押さえられていた。その間『万朝報』は殉死と断定し、盛んに当局は真相を公表するように要請していた。(注3)十六日午後四時、小笠原長生子爵が発表した公式遺書は、『国民新聞』のスクープと二ヶ所違つてゐた。明らかに、当局による改竄であつた。(注4)一方、新聞に掲載された知識人の談話は、殉死に対して否定的であつた。こういう状況の中で、鷗外は筆を執つたのである。しかも『興津弥五右衛門の遺書』の冒頭の「某儀今年今月今日切腹して相果候事奈何にも唐突の至にて、弥五右衛門奴老耄したるか、乱心したるかと申候も可有之候へ共、決して左様の事には無之候。」と、「遺言条々」の「第一自分此度御跡を追ひ奉り自殺候処恐入候

儀其罪は不軽存候、然る処明治十年役に於て軍旗を失ひ、其後死処を得度心掛候其機を得ず、皇恩の厚に浴し、今日迄過分の御優遇を蒙り、追々老衰最早御役に立候時も無余日候折柄、此度の御変何共恐入候次第、茲に覚悟相定候に候」との文体が類似している事を考慮するならば、十六日の発表後、十八日迄の間に一気に作品化されたと推測してよからう。『興津弥五右衛門の遺書』が発表された時、乃木殉死と重ね合わせて読み取つたのは加納作次郎であつた。氏は「森鷗外氏の『興津弥五右衛門の遺書』(中央公論)は、久しく死処を求めて居た弥五右衛門が、先君の十五回忌に其の後を追うて自殺した時の遺書である。乃木大将の自殺と照し合せて読めば面白い。」(注5)と言つてゐる。それを更に精緻に論じたのが、斎藤茂吉であつた。(注6)一方、唐木順三氏は『かのやうに』からの作品群を検討し、鷗外の精神の軌跡を辿り、乃木殉死が弛緩から緊張へのスプリングボードとなつた事を論じてゐる。(注7)更に『灰燼』を挺子に歴史小説への移行を考えたのは、竹盛天雄氏であつた。(注8)尾形仿氏は、乃木殉死に対する批判の批判という形で、造型化されたと論じてゐる。(注9)これらの先学の考察した点が綯交ぜになつて、歴史小説が想定されたと考えてよからう。

私がかここで確認しておきたい事は、鷗外が立っている現実である。新聞が報道する殉死への批判、遺書が押えられ発表されない事実、改竄された遺書の公表、知識人の言動、宮内省や軍人社会の動揺の中で、鷗外日記は八月十四日▽

乃木の邸を訪ふ。石黒男忠惠の要求により鶴田禎次郎、徳岡熙を乃木邸に遣る。

△九月十五日▽

午後乃木の納棺式に蒞む。

△九月十六日▽

軍医部長を第一衛戍病院に会して訓示する所あり。C. Cagawa

と称するもの松本楽器店員の肩書ある名刺を通じて乃木希典の歌を求む。拒絶す。

△九月十八日▽

午後乃木大将希典の葬を送りて青山斎場に至る。興津弥五右衛

門を叩いて中央公論に寄す。

となっていて、相変わらず事実のみ記して何も語っていない。ただ「拒絶す」のみに冷たい厳しさが感じられるのみである。世情騒然とした中で、鷗外は何を考え、何を思っていたのであろうか。乃木殉死を始めて、衛生部人事にしても、官僚機構に身を寄せている故に、そのからくりを冷徹と眺めている鷗外がいる事を忘れてはなるまい。少くとも、このような現実を、過去の時代に置き替える事によって歴史小説集『意地』は成立を見たのである。最初から近代人としてのイデーを、過去の主人公に托す事によって成立している芥川龍之介や菊池寛の歴史小説と異っている事は言うまでもない。鷗外自身官僚機構の内に居たが故に、内部からの観察に迫真性があり、そこにリアルでシニカルな目が爛々と底光りしている点に注目したい。

(二) 『興津弥五右衛門の遺書』改作をめぐる

歴史小説集『意地』（大正二年六月十五日、靑山書店刊）に収録され

ている作品は、『阿部一族』、『興津弥五右衛門の遺書』、『佐橋甚五郎』の三作である。乃木殉死に触発されて一気呵成に書き上げられた『興津弥五右衛門の遺書』は、十二月下旬から史料渉獵の末、(注10)大正二年四月三日から六日の間に改作されたと考えられる。すでに、大正元年十一月二十九日に『阿部一族』、大正二年三月九日に『佐橋甚五郎』が脱稿されている。大正二年四月の鷗外日記をみると、

三日(木) 夕より興津弥五右衛門に関する史料を整理す。

六日(日) 阿部一族等殉死小説を整理す。

七日(月) Macbeth の訳に着手す。

八日(火) 植竹喜四郎に軼事篇の原稿をわたす。

九日(水) 植竹喜四郎が来て請へるにより、軼事篇を意地と改む。

とあり、改作に着手し、「軼事篇」から「意地」に替わった様子も知ることが出来る。初稿から定稿に定着する過程は、『佐橋甚五郎』が字句の修正に止まるのに対し、『阿部一族』は史料の吟味によって、かなり手が加えられている。しかしながら、改訂はテーマの質的変化を齎してはいない。ところが、『興津弥五右衛門の遺書』は、増補改訂と云うより、改作であり、テーマの内実に影響を及ぼして来るのである。今、この作品の改作の過程を分析しつつ、鷗外を把みたい。すでに初稿と定稿とを比較検討し、その意味を考えようとした論文は枚挙にいとまがないほど多い。中でも、唐木順三氏、竹盛天雄氏、磯具英夫氏、尾形仿氏、藤本千鶴子氏の労作が光っている。(注11)今更、それに付加すれば蛇足の謗りを免れないであろう。一、二の相違を指摘した所で論旨に影響がないとすれば、これも無意味であろう。しかしながら、初稿から

定稿への改作が成功なのか、失敗なのかと云う点に関して、論議を集中させると、まだ不透明な部分があるようだ。ここでは、この点を考慮しつつ論じたい。

『興津弥五右衛門の遺書』の初稿と定稿とを比較すると、殉死の動機をテーマに殉死の様相と興津家家譜とが相違していたり、付加されたりしている。初めテーマに関する興津・横田（初稿では相役となっていない）論争をとりあげ、検討したい。

横田清兵衛

興津弥五右衛門

一、仮令主命なりとも、香木は無用
主君の申附けられ候は、珍らし
の翫物に有之、過分の大金を擲
き品を買ひ求め参れとの事なる
候事は不可然、所詮本木を伊達
に、此度渡来候品の中にて、第
家に譲り、末木を買求めたき由
一の珍物は彼伽羅に有之、其木
申候。
に本末あれば、本木の方が尤物
中の尤物たること勿論なり、そ
れを手に入れてこそ主命を果す
に当るべけれ、

二、一国一城を取るか遣るか申す
奈何にも賢人らしき申条なり、
場合ならば、飽く迄伊達家に楯
乍去某は只主命と申物が大切な
を衝くが宜しかるべし、高が四
るにて、主君あの城を落せと被
畳半の爐にくべらるる木の切れ
仰候は、鉄壁なりとも乗り取
ならずや、（中略）主君御自身
り可申、（中略）珍らき品を求
にてせり合はれ候はば、臣下と
め参れと被仰候へば、此上なき
して諫め止め可申儀なり、仮令
名物を求めん所存なり、主命た

主君が強ひて本木を手に入れた
る以上は人倫の道に悖り候事は
く思召されんとも、それを遂げ
格別、其事柄に立入り候批判が
させ申す事、阿諛便佞の所為な
ましき儀は無用なりと申候。
るべしと申候。

三、これが武具扱ならば、大金に代
茶儀は無用の虚礼なりと申さ
ふとも惜しからじ、香木に不相
ば、国家の大礼、先祖の祭祀も
応なる価を出さんとせらるゝは
総し虚礼なるべし、（中略）こ
若輩の心得違なりと申候。
れが主命なれば、身命に懸けし
も果さでは相成らず、

と言ひ、遂に討果して後、興津は松向寺殿三斎忠興公に「主命大切と心得候為とは申しながら、御役に立つべき侍一人討果して候段、恐入候へば、切腹被仰附度と申候」と願ひ出る。それに対して、松向寺殿は「総て功利の念を以て物を視候はば、世の中に尊き物は無くなるべし」と、かえって賞讃の言葉を掛えるのであった。そして、テーマを内包しているこの興津・横田論争は、初稿も定稿も同じである。そうすると、テーマに質的变化がないとすれば、単なる増補改訂の域に止まっているのであろうか。初稿『興津弥五右衛門の遺書』を書き、中絶した（させた）とはいえ『灰燼』で国家政変のアウトラインを示し、『阿部一族』『佐橋甚五郎』を執筆した後の定稿『興津弥五右衛門の遺書』に、鷗外の精神の変動は認められないのだろうか。本来ならば、テーマそのものが、質的变化をきたさなければならぬ筈である。それなのに、テーマが不変であるとは如何にも納得しがたいものを感じる。

結論を述べるならば、定稿は『阿部一族』の線上に位置付けられ、初

稿とは明らかに質的差異を持つている作品である。そして、この改作は鷗外の精神の在り様を窺わせ、成功している。鷗外はテーマの部分を変えずに、殉死の様相や興津家の先祖の事蹟を叙述中に批判を象徴させている。それによって、側面からテーマを突き崩す方法を用いているのである。それは、決してオーソドックスな方法ではないかもしれないが、そうせざるを得ない鷗外の立場を考慮に入れなければならない。テーマが不変であるような叙述に、我々は目暗まされて来たのである。具体的に論証して行こう。初稿において、弥五右衛門は「死後の名聞の儀」が大切な故に、「遺書」を書き、そこに「某平生朋友等無之候へ共、大徳寺清宕和尚は年来入懇に致居候へば、此遺書国許へ御遣被下候前に、御見せ被下度、近郷の方々へ頼入候。」と言ひ、遺書の宛名も「皆々様」としている。そして、「此遺書蠟燭の下にし、認居候処、只今燃尽候。最早新に燭火を点候にも不及、窓の雪明りにし、皺腹搔切候」と言つて、切腹して行くのである。それに対し、定稿では「御当代に宿望言上」し、「御振舞に」預り、引出物を載き、「銭別として詩歌」を「烏丸大納言資慶卿」を始め多くの人から送られ、「船岡山の下に飯屋を建て、大徳寺門前より飯屋迄十八町の間、藁筵三千八百枚余を敷き詰め、飯屋の内には畳一枚を敷き、上に白布を覆有之候由に候。いかに晴がましく候て、心苦しく候へ共、是亦主命なれば無是非候。」と言う叙述になっている。明らかに晴がましく殉死であり、殉死興業である。ここで注意したいのは弥五右衛門の「いかに晴がましく候て、心苦しく候へ共、是亦主命なれば無是非候」（傍点山崎）と言う言葉である。横田清兵衛との香木論争の時の弥五右衛門の主張する「主命なら

ば」とは、質的に明白に違っている。ここに鷗外のシニカルな批判の目がある。わざわざ殉死興業にして見せた所に、鷗外の皮肉なまなざしを感じざるを得ない。更に興津家の先祖の事蹟を描くにあたって、「景一の四男忠太は後四郎右衛門景時と名告つた。元和元年大阪夏の陣に、三齋公に従つて武功を立てたが、行賞の時思ふ旨があると云つて辞退したので、追放せられた。」（傍点山崎）と言う不忠譚を挿入している。これは何を意味するのだろうか。むしろ、この箇所を削除した方が忠義に厚い興津家という印象が深まったであろうと想像される。あえて、この部分を描いたのは史料を尊重する念が厚かつたためであろうか。それも一概に否定は出来ないが、削除しても良い所をあえし残した所に、鷗外の意識的で意図的なものが秘んでいたのではなからうか。そして、史料を尊重すればするほど、矛盾に満ちた人生の現実が浮び上がってくるのである。それをありたい姿としてではなく、あつたままの姿を描き切つた所に作家の見ている人生があるのである。

かくの如く改作にあつて一見初稿とテーマを同じくしながら、そのテーマを突き崩す要因としての殉死興業、不忠譚を挿入している。この事実は、何よりもテーマそのものの否定に他ならない。とりもなおさず鷗外の批判でもある筈である。一体何故にこのような方法を用いたのであろうか。初稿を生み出したエネルギーは、乃木殉死に纏る当局の干渉や、一見近代的にみえる知識人の裏にある卑俗な功利主義や合理精神に対する怒りから発している。鷗外として、それが乃木大将であつたらと言つて、殉死を肯定するほど単純ではない。ましてや、初稿が殉死肯定であり、冷静になつて観照的に書きあげた『阿部一族』は、謳いあ

げた『興津弥五右衛門の遺書』に対する反省であるなどという意見を信ずるわけには行かない。小倉左遷を経て以後の鷗外は複雑なねじれをもっており、仮面の下の素面はなまなかでない筈である。それは買破りではない。『かのやうに』を見ても、鷗外が真面目に八かのやうにの哲学Vを信ずるほど単純ではなかったと思われる。(注12) 乃木殉死に関しても、わけ知り顔の批評や遺書を改竄する当局のやり方が気に入らないのである。それを直截に表に現わすほど若くはない。それらを批判し、否定する替りに、乃木殉死肯定を以て報いたのである。政治と文学の場に引き裂かれている鷗外故に、側面から造型せざるを得ないのは已む無い事である。そして、第一創作集『意地』は、後の歴史小説が引き裂かれた生の軌跡を埋めるべく、意図的にテーマに関わっていったのに反し、あきららかに、明治から大正へのドラマの中で、官僚機構批判から出発している所に特色を認めることが出来る。そのことは何よりも、『興津弥五右衛門の遺書』改作の経緯が物語っている。ただし、誤解のないように言っておきたい事は、「総て功利の念を以て物を視候はば、世の中に尊き物は無くなるべし」という一句を、否定しているわけではない。鷗外その人は乃木殉死にそれを認めたであろうことは、否定できない。ただ作家鷗外が、この一句に自覚的に関わって来るのは、大正二年六月二十日に執筆された『鎚一下』以後であろう。これが核になって、鷗外の生が充足を望み、理想的人間像の模索を始めた時、八無私なる精神Vを以った人物が造型されて来るのである。

(三) 八意地Vの実相

鷗外はキーワードとしての八意地Vをどのように使用しているのか、確認しておきたい。『阿部一族』において、阿部弥一右衛門の言動に関して、「弥一右衛門は意地ばかりで奉公して行くやうになつてゐる。忠利は初めなんとも思はずに、只此の男の顔を見ると、反対したくなつたのだが、後には此男の意地、で勤めるのを知つて憎いと思つた。」(傍点山崎)と二ヶ所使用されている。単行本を『意地』とし、更に自筆の『意地』広告文の中で、『佐橋甚五郎』に「意地、強きすねもの」と表現している箇所を加えると、合計四箇所である。更に『意地』を分析すると三つの意地が描出されている。『興津弥五右衛門の遺書』の興津弥五右衛門、『阿部一族』の柄本又七郎、竹内数馬に見られる八忠義なる意地V、阿部弥一右衛門に代表される八廉恥・名聞なる意地V、『興津弥五右衛門の遺書』の横田清兵衛、『佐橋甚五郎』の佐橋甚五郎における八角逐の意地Vに区分される。八忠義なる意地V、八廉恥・名聞なる意地V、八角逐の意地Vの内実を、作品を分析しつつ把えたい。

八忠義なる意地V

興津弥五右衛門の意地なる心は、横田清兵衛との香木論争によく現われている。弥五右衛門の横田に対する反論の中で共通して語られる言葉は、「主命を果す」、「只主命と申物が大切」、「主命なれば、身命に懸けても」と云う語である。そして「主命たる以上は、人倫の道に悖り候事は格別、其事柄に立入り候批判がましき儀は無用なり」と言っている。まさに忠義一徹で、主命絶対服従の信念によって貫かれている。「人倫

の道に悖り候事」以外は、主命絶対であつて、自己懐疑も葛藤も入り込む余地はない。自分の命は主君にささげた命であり、それ故に、主君の為に潔く死ねるのである。勿論、主君と己との間にびんと張った糸の如き関係は、己は主君に「役に立つべき侍」である事が第一義である、己が主君から寵愛されているかどうかなど考える余地さえないのである。『阿部一族』の柄本又七郎もこう言う類の人物である。阿部一族の立て籠った山崎の屋敷の隣に住んでいる柄本又七郎は阿部家と親交もあり、悲運に傾いて行く一族を同情を以て見ている。又七郎は或夜女房を阿部家へ見舞に遣った。それは、「婦女の身として密かに見舞ふのは、よしや後日に発覚したとて申訣の立たぬ事でもあるまい」と考えたからである。いよいよ阿部の屋敷へ討手の向ふ前夜、又七郎は「これは逆賊を征伐せられるお上の軍も同じ事である。(中略)武士たるもの此場合」に懐手をして見てゐられたものでは無い。情は情、義は義である。」と考へ、「阿部家との境の竹垣の結繩を悉く切つて置いて、翌朝討手として阿部家の前に立ったのである。手負いながらも、弥五兵衛に深手を負わせ功を立てた。そして、「元龜天正の頃は、城攻野合せが朝夕の飯同様であつた、阿部一族討取りなどは茶の子の茶の子の朝茶の子ぢや」と破顔するのであつた。そして、光尚から拝領の地の藪山だけ辞退したのである。そのわけは、「竹は平日も御用に立つ。戦争でもあると、竹東が沢山いる。それを私に拝領しては気が済まぬ」と云う考えからであつた。この柄本又七郎の「情は情、義は義」であると考えの中には、情と義との相剋は見られない。「御役に立つ」「御用に立つ」事を一義とする戦国期の武士の精神を濃厚に持っている。時は幕藩体制が確立期に

入ろうとする頃である。

弥五右衛門と又七郎は同気質の武士であるのに対し、忠義なる武士ではあるが、竹内数馬の場合は少しく違ふように思われる。数馬は主君の光尚から阿部討取りの表門の総大将を命ぜられ、喜々として詰所に下がると、傍輩からこの度の役目は林外記の推挙によると聞かされる。

「さうぢや。外記殿が殿様に言はれた。数馬は御先代が出格のお取立をなされたものぢや。御恩報じにあれをお遣りなされいと云はれた。物怪の幸ではないか。」「ふん」と云つた数馬の眉間には、深い皺が刻まれた。「好いわ。討死するまでの事ぢや。」

と言つて館を退出するのであつた。そして、数馬は「外記に傷けられたのは忍ぶことも」出来るが、外記の策を聞き入れた殿様を思うと、「殿様に棄てられ」たと同じ事ではそれは「忍ぶことが出来ない」と思うのである。林外記の心中には、数馬は「殉死する筈であつたのに、殉死しなかつたから、命掛の場所に遣る」方がふさわしいと云う判断が働いていたと思れる。数馬は気付いていないが、同輩の「物怪の幸ではないか」という冷たいまなざしも注意したい。数馬は「只一刻も早く死にたい。死んで雪がれる汚れでないが、死にたい。犬死でも好いから、死にたい」と一途に思い、討入りの日死に急いだのである。竹内数馬のような武士は徳川幕藩体制下に生れし来たタイプであろう。主君の寵愛の下に、忠義を尽すのである。君臣のその絆が断ち切れた時は、死しか残されていないのである。数馬の意地は恩愛の絆が破れた所から、死へ傾斜して行く時発揚されるのである。自殺にも等しい死に様であつた。しかしながら、浪人して去る心は持っていない。恥辱故に死を選ぶだけ、幕藩体制

前の武士のなごりが残っていると見えよう。

△廉恥・名聞なる意地▽

この△廉恥・名聞なる意地▽に代表されるのは、阿部弥一右衛門であろう。日頃の弥一右衛門の行動を見ると、

弥一右衛門は外の人の言ひ附けられてする事を、言ひ附けられずにする。外の人の申し上げてする事を申し上げずにする。併しする事がいつも肯綮に中つてゐて、間然すべき所が無い。弥一右衛門は意地ばかりで奉公して行くやうになつてゐる。

と説明されている。更に、主君の忠利は、「只此男の顔を見ると、反対したくなる」のであるが、後には「此男の意地で勤めるのを知つて憎いと思つた」のである。その原因を考えた時、忠利は非を認め、改めようと思ひながらも、「月累り年が累るに従つて、それが次第に改めにくくなつたのである。鷗外は、「人には誰が上にも好きな人、厭な人と云ふものがある。そしてなぜ好きだか、厭だかと穿鑿して見ると、どうかすると捕捉する程の抛りどころが無い。忠利が弥一右衛門を好かぬのも、そんなわけである。」と説明している。鷗外が典拠にした原史料『阿部茶事談』には見えない部分であり、鷗外の創作である。こういう目に見えない人間関係の相剋の認識こそ、大切である。おそらく、鷗外が生活して体験する現実感覚が、十分生かされてゐると思われる故に、リアリティに富んでいるのである。鷗外は弥一右衛門と忠利との関係を、「弥一右衛門と云ふ男はどこかに人と親み難い処を持つてゐるに違ひ無い」と言い、「どうも阿部には附け入る隙が無い」と言う先輩の言葉を引いて、「忠利が自分の癖を改めたく思ひながら改めることの出来なかつた

のも怪むに足りない。」と分析している。君臣の相剋と云うより、弥一右衛門の性格的な要素に原因を求めている。

忠利の病が重くなり、弥一右衛門は「忠利の夜伽に出る順番が来る度に、殉死したいと云つて願」い出るが、その度に忠利は、「そちが志は満足に思ふが、それよりは生きてゐて光尚に奉公してくれい」と言つて許可しない。「殉死にはいつどうして極まつたともなく、自然に掟が出来る。」のであり、「是非殿様のお許を得なくてはならない」のである。許可なくして殉死すれば大死であるが、「値遇を得た君臣の間に黙契があつて、お許はなくてもお許があつたのと変らぬ」処置がとられるのであると鷗外は述べている。殉死とは「報謝と賠償との道」であるとも付け加えている。弥一右衛門には、内藤長十郎や津崎五助のような生き方は出来ないのである。それだけ武骨で、不器用で一徹なのである。弥一右衛門が何度お願いしても、同じ事を繰り返さばかりであつた。忠利の心中はと言へば、

自分は彼等生きながらへさせて、自分にしたと同じ奉去を光尚にさせたいと思ふが、其奉公を光尚にするものは、もう幾人も出来てゐて、手ぐすね引いて待つてゐるかも知れない自分の任用したものは、年来それぞれ職分を尽して来るうちに、人の怨を買つてゐよう。少くも娼妓的になつてゐるには違ひない。さうして見れば、強ひて彼等にながらへてゐると云ふのは、通達した考ではないかも知れない。

(傍点山崎)

と多少の慰藉を感じているのである。しかし、これが真実ならば、弥一右衛門に対して拒否の答えをするのは、タテマエとホンネが相違してい

る。明らかに従来の暗闘が尾を引いていると言えよう。

忠利から許可を得られないうち、忠利は亡くなってしまった。その時、弥一右衛門はどのような態度をとつたのであろうか。「犬死と知つて切腹するか、浪人して熊本を去るかの外、為方があるまい。だが己は己だ。好いわ。武士は妾とは違ふ。主の氣に入らぬからと云つて、立場が無くなる筈は無い」と考へて、勤めていたのである。(傍点山崎)しかし、同輩の冷たいまなざしを受け、「不快で溜らない」が、「己をどれ程悪く思ふ人でも、命を惜む男だとはまさかに云ふことが出来まい」と自恃なる心を支えにして、「昂然と項を反らして詰所へ出て、昂然と項を反らして詰所から引」いていた。ところが、「阿部はお許の無いを幸に生きてゐると見える、お許は無うても追腹は切られぬ筈が無い(中略)瓢箪に油でも塗つて切れれば好いに」と云う噂が耳に入つて来た。この時ばかりはさすがの弥一右衛門も激する所があつた。噂に腹を立てたのではなく、その噂の内容が「命の惜しい男」であると言われた事に立腹したのである。そして、子供達を集め「目の先ばかり見える近眼共を相手にするな。(中略)おぬし達を侮るものもあらう。恥を受ける時は一しよに受けい」と言つて、瓢箪に油を塗つて子供等の面前で切腹して果てたのである。

阿部弥一右衛門はまさに戦国武士の氣質そのままの人である。己の信念を貫くために右顧左眈することなく、頑固なほど一徹で、武士として何よりも恥辱を受けた事に耐えられなかつたのである。「主の氣に入らぬからと云つて、立場が無くなる筈は無い」と思うほど、君臣間の情など一義にしていない。おそらく、戦場で命を捨てて「御役に立つ」以外

考へていなかったであろう。主君の側に近づく事さえ、阿諛便佞の所為であり、佞臣と映つたであろう事は想像に難くない。

△角逐の意地▽

鷗外は『意地』の広告文の『住橋甚五郎』の箇所を、

小山の城の月見の宴、城将甘利四郎三郎の寝首をかいた当年の美少年「佐橋甚五郎」は、家康を鼻の先であざ笑うて、浜松を遂雷して、窃かに朝鮮に往きて、慶長十二年に朝鮮の使者となつて来朝して、済まし顔で家康に謁見して歸りたる奇人、意地強きすね者、流石の家康も警戒したる人物、その一代の奇しき運命の物語。

と記している。驚撃ち事件が発端となつて、出奔した甚五郎を甘利を討つことで帰参を許そうとした家康は、それが実現すると、「約束通り甚五郎を召し出したが、目見えの時一言も甘利の事を言はなんだ。」(傍点山崎)後、北条新九郎氏直の軍と戦つた時、

佐橋甚五郎は若武者仲間の水野藤十郎勝成と一しよに若御子で働いて手を負つた。年の暮に軍功のあつた侍に増加があつて、甚五郎も其数には漏れなんだが、藤十郎と甚五郎との二人には賞美の詞が無かつた。(傍点山崎)

とある如く、家康の甚五郎の力に対する警戒心が、冷たいまなざしになつて現われている点に注目したい。それに耐えている甚五郎がいる事も忘れてはなるまい。「不断小判百両を入れた胴巻を肌に着けてゐる事と無関係ではあるまい。大阪方への使者の人選の折、正使の石川与七郎数正が佐橋甚五郎を推挙すると、家康は

あれは手放しては使ひたう無い。此頃身方に附いた甲州方の者に聞

けば、甘利はあれを我子のやうに可哀がつてをつたげな。それにむこい奴が寝首を掻きをつた。

と言う声を聞いた甚五郎は、「ふんと鼻から息を漏らして軽く頷く」と、退出し、そのまま行方をくらましてしまった。甚五郎の「ふん」には明らかに反抗の意志が見られる。阿部弥一右衛門の時代とは異つて、事に注意したい。甚五郎が自由に出奔できたのは、幕藩体制がまだ固まつていない時代である点を考慮に入れなければならないだろう。

次に興津弥五右衛門と香木論争をする横田清兵衛の場合を見てみよう。横田清兵衛は「武具杯ならば、大金に代ふとも惜しからじ」と考へており、それ故に「高が四疊半の爐にくべ」る香木に執着する愚かさを嘲笑するのである。そして、主君がそれを望むならば、むしろ「諫め止め」るべきだとさえ言っている。一見人忠義なる意地 \vee に見えるが、卑俗な功利的合理主義の論理である。

このように人意地 \vee の実相を眺めると、ここに現われた人意地 \vee は近代の抵抗精神から発揚されたものとは異質である。『興津弥五右衛門の遺書』、『阿部一族』の時代背景は、幕藩体制が確立した時期であるし、『佐橋甚五郎』は確立前である。そして、興津弥五右衛門、阿部弥一右衛門、柄本又七郎も「元亀天正の頃」の即ち、戦国武士の気質を持つてゐる。おそらく、幕藩体制が確立するに従つて、これらの武士は生きにくくなつて来る筈である。佐橋甚五郎は、徳川幕府の浪人達と同質であろうか。幕藩体制下では竹内数馬のような武士が一般的であろうが、その中で強靱に生き抜くには、林外記のように小才の氣く人物であろう。もうそうなれば、本来の武士ではなからう。諸制度と組織を動かして行

く官僚である。大物官僚ならまだしも、弥一右衛門ではないが「目の先ばかり見える近眼共」で、なまじ小才が氣くだけ始末が悪いと言えよう。このような類の人物が多くなつて来るのである。鷗外の目には明治から大正への過渡期と、戦国から徳川幕藩体制への過渡期がオーバーラップされていたのではないだろうか。推測であるが、『阿部一族』の竹内数馬のような立場に立つた人々が、乃木殉死後あつた筈である。

歴史小説『意地』の世界を貫く人意地 \vee は、戦国武士としての同質の意地が、時代の過渡期の状況の中で、価値観の相違や、個と組織との抵抗を生み、ともに終焉を迎えなければならぬ事を如実に示している。

(四) 政治的人間

ここでは『阿部一族』の林外記と、『佐橋甚五郎』の徳川家康をとりあげて考察したい。光尚の側近で大目附役の林外記は、「小才覚が」あり、「物の大体を見る事に於ては及ばぬ所があつて、兎角苛察に傾きたがる男」であつた。彼が提案したのは阿部家の人俸禄分割策 \vee である。それは、「真の殉死者と弥一右衛門との間には境界を附けなくてはならぬ」と考えたからである。これが後に権兵衛を始めとして、阿部家滅亡の導火線になるのである。次に阿部の討手の表門総大将に竹内数馬を推挙したことである。しかも、「数馬は御先代のお取立をなされたものぢや。御恩報じにあれをお遣りなされい」と云う魂胆があつたのである。仕事の上では、人俸禄分割策 \vee の如く、一見道理にかなつた合理主義で処理し、後者の数馬の例に見られる如く、政敵を追い落しにかかる口舌の徒でもある。いずれの場合も己の手を汚していない。『栗山大膳』の

倉八十太夫もまたその一人である。

家康の場合は林外記と違って、自ら絶対の権力を握っている故に、その深謀遠慮ぶりは見事である。甚五郎の従兄源太夫が、驚撃事件の一件を語って助命を請うと、家康は「そちが話を聞けば、甚五郎の申分や所行も一応道理らしく聞えるが、所詮は間違うてをるぞよ。併しそちも云ふ通り、弱年の者ぢやから、何か一廉の奉公をいたしたら、それをしほに助命いたして遣はさう。」と言うのである。家康の言葉は微妙である。「一応道理らしく聞えるが、所詮は間違うてをる」とは、具体的に甚五郎のどのような行動を指すのであろうか。少くとも指し示す何物もない。

「道理らしく」と言って、相手を肯定するように見せかけ、「間違うて」と決めつけるのは、肯定+逆接の接続詞+否定という政治家の答弁と類似している。力で押えつけ、それから条件を呈示するのである。家康が示した条件は「甚五郎は伶俐な若者で、武芸にも長けてゐるさうな。手に合ふなら、甘利を討たせい。」と云うのである。甘利を討ち果して帰参すると、約束通り「召し出」すが「一言も甘利の事を」聞きもしない。不気味な甚五郎の力を計量し、警戒して用いている。後に「増」はするが「賞美の詞」を掛けなかつたのも先と同じであろう。甘利を討つ事を要求しておきながら、「甘利はあれを我子のやりに可哀がつてをつたげな。それにむごい奴が寝首を掻きをつた」と平然と言つてのけるのである。そのような自己矛盾を侵しながらも、相手の力を適当に分散させ、自己の利益になる所で上手に働かせ、危険を感じると、すぐ遠ざけてしまうと云う力の力学を家康は心得ている人物として造型されている。勿論、甚五郎に家康の政治の力学を見抜く目があったればこ

そ、「ふん」と云つて出奔してしまうのである。ここに、組織の中で生きて来た鷗外の鋭い感覚に脱帽せざるを得ない。

(五) 意地と自由

鷗外は歴史小説の方法論の脚注とも言うべきエッセイ『歴史其儘と歴史離れ』の中で、私の従来の小説は「事実を自由に取捨して、纏まりを附けた迹がある習で」あったのに対して、「あの類（『わたくしの近頃書いた、歴史上の人物を取り扱つた作品』を指す。山崎注記）の作品にはそれが無い」と言い、更に「わたくしは近頃小説を書く時全く斥けてゐる」と述べている。そして、その理由を「わたくしは史料を調べて見て、其中に窺はれる人自然Vを尊重する念を發した。そしてそれを猥に変更するのが厭になつた。」と言い、更に「わたくしは又現存の人が自家の生活をありの儘に書くのを見て、現在がありがたの儘に書いて好いなら、過去も書いて好い筈だと思つた。」と語っている。

エッセイの「纏まりを附けた迹がある習」を否定すると言うことは、どういふ事なのであろうか。それを柄谷行人氏は「鷗外は歴史であれ現実であれ、それらを透過的にみる視点、つまりアイディアリスティック（プラトニック）な視点を基本的に否定したといつてよいのである。」と言ひ、「ここに、鷗外の歴史小説が内包している方法的な懷疑がある」と述べている。更に氏は鷗外が「自然」を「猥りに変更するのが嫌になつた」と告白しているのは、「史料を一つの人纏まつたV觀念に合わせて整理したくないということにほかならない」のであると述べている。つまり、「史料が示す矛盾や沈黙に忠実でありたい」事であり、

「歴史小説のリアリティは、そういう不透明さを直視するところから生れ」（注13）たのであると述べている。柄谷氏の作家鷗外の方法を剔抉する鋭い見解になっている。しかしながら、鷗外は歴史小説の初めからこのような方法を持っていたわけではない。勿論『阿部一族』などは柄谷氏の見解をあてはめることが出来るだろうが、『意地』の段階では、まだまだ十分だとは言いい切れない。鷗外の追求する主題と方法とが、明確な意図を以て造型されるようになって来るのは、『護持院原の敵討』からであろう。作品箇々には、鷗外の現実を見つめる目は鋭く行き渡っている。個人がいくら足掻いた所で、武士集団というわくの外へは出られない。組織の中で、個人の意地はぶつかり合い、引張り合いしなから、お互いを無力にして行く事に気付いていない。作家鷗外はその世界を觀照的に眺めている。鷗外の目は個にむけられていても、組織そのものの、組織の背後の歴史に十分及んではない。初稿『興津弥五右衛門の遺書』や、『佐橋甚五郎』を描写する鷗外の血は温かすぎる。確かに鷗外の生きている现实生活の中で、組織と個人のせめぎあいを実感しているだけに、その切り取った現実を、作家として再構成する時、作品の中が生き生きと再成されている。シニカルなまなざしは、リアルに作品に関わって来ている。『阿部一族』は破綻を見せないが、『佐橋甚五郎』では、かえって、家康の造型に成功しているが、甚五郎の心理まで分析解剖する所までいっていない。集としての『意地』は、組織の中で生きている鷗外その人の憤怒から発想されている故に、集団の中の人間の拮抗する様子は生動を持って語られている。

鷗外は△意地▽を描くことで何を発見したのであろうか。意地に固執

しそのぎりぎりの地点まで意地をつめて行った時、不動心が生まれることにならないだろうか。不透明な現実の中で、妙に中途半端な形での△意地▽は、徒らに生の荒廃を招くだけである。自分の△意地▽をみつめ、△意地▽の上に居直り続ける時、いままでの不透明な現実がみえてき、やがて闊達な世界が拓けてくるに違いない。少くとも鷗外は『意地』を書くことで、この事を認識したと思われる。あの「総て功利の念を以て物を視候はば、世の中に尊き物は無くなるべし」と言うテーゼは、鷗外の新しい精神を吹き込まれて、『錠一下』の無私の精神となり、『護持院原の敵討』の九郎右衛門に結晶して行くことになるのである。まさに目標の明らかでない敵討に精進する心は『意地』のなにもでもない筈である。鷗外が乃木殉死を契機に発見したものは、自由闊達な精神の飛翔となる核としての△意地▽であつたらう。鷗外の目は当然求心的になつて来、外側よりも内側にむけられることになるのである。そこに理想的な人間の生き方の模索が始まるのである。それ故に、個をとりまく、外の歴史に目が十分行き届かない誇りはまぬがれない。それは史伝小説『淡江抽斎』を俟って、始めて可能になるのである。充実した生を希求する鷗外の足跡は、歴史小説の流れの中に現代小説を挟み、ジグザグしたコースを辿りながら、やがて、他人を描くのではなく、自己を描く所に辿り着いて来るのである。この不退転の境地に立った時、史伝小説の世界が拓けて来るのである。歴史の△嵐▽に翻弄され続ける没落士族の運命を、作為のない目で眺めている鷗外がいる事を忘れてはなるまい。

(注)

1 山田弘倫『軍医森鷗外』（昭和十八年六月二十日、文松堂書店刊）二七八

頁。

- 2 「跡見学園女子大学紀要」(第五号、昭和四十七年三月十五日発行) 掲載の拙論『鷗外・『灰燼』試論』、一〇頁。
 - 3 「解釈と鑑賞」(第三十四卷第一号、昭和四十四年一月一日発行) 掲載の生松敬三『乃木將軍の殉死』——その評価の変遷、一五頁。
 - 4 大浜徹也『明治の軍神』——乃木希典——(昭和四十五年七月十五日、雄山閣刊) 所収の「明治の終焉」、一九六頁。
 - 5 「早稲田文学」(八四、大正元年一月一日発行) 掲載の加能作次郎担当の『十月の文壇』
 - 6 「文学」(第四卷第六号、昭和十一年六月一日、岩波書店発行) 掲載の齋藤茂吉『鷗外の歴史小説』、二八頁。
 - 7 唐木順三『鷗外』(昭和十八年九月十日、筑摩書房刊) 所収の『歴史を超えるもの』、一三三頁。
 - 8 「文学」(第二十八卷第一号、昭和三十五年一月一日、岩波書店発行) 掲載の竹盛天雄『『灰燼』幻想』、一一頁。
 - 9 * 稲垣達郎編『森鷗外必携』(昭和四十三年二月十日、学燈社刊) 所収の尾形仇『阿部一族』、一五一頁。
* 「東京教育大学文学部紀要」(七輯、昭和三十七年三月発行) 掲載の尾形仇『鷗外歴史小説の史料と方法』、後、日本文学研究資料叢書『森鷗外』(昭和四十五年一月二十五日、有精堂刊) に収録。
 - 10 大正元年十二月二十二日の日記に「興津の子孫の事に就きて賀古鶴所と往復す。」とある。
 - 11 * 唐木論文は注7に同じ。唐木順三氏の解説を持った筑摩選書『森鷗外・意地』(昭和二十三年十一月五日発行) は、初稿と定稿が並べられ、アンダーラインで区別されている。
* 竹盛論文は、「明治大正文学研究」(特集「鷗外の新研究」、第二十二号、昭和三十二年七月十五日、東京堂発行) 掲載の『歴史小説集『意地』おぼえがき——「興津弥五右衛門の遺書」改作の問題——、四〇頁。
* 「文学」(第三十五卷第十一号、昭和四十二年十一月一日、岩波書店発行) 掲載の磯貝英夫『鷗外歴史小説序説』、一頁。
- * 尾形論文は注9に同じ。
- * 『近世・近代のことばと文学』(真下三郎先生退官記念論文集、昭和四十七年十二月十日、第一学習社刊) 所収の藤本千鶴子『鷗外『阿部一族』の資料』『阿部茶事談』の性格』、四八九頁。藤本千鶴子篇『校本・阿部茶事談』七三二頁。なお、藤本氏には、「日本文学」(第二十二卷第二号、一九七三年二月一日、未来社発行) 掲載の『歴史上の「阿部一族」事件』——殉死事件の真相と鷗外の「阿部一族」——という論文もある。
 - 12 * 「日本文学」(一九七二年一月一日、未来社発行) 掲載の小泉浩一郎『森鷗外『かのやうに』論』——主題把握への試み——、七八頁。
* 「古典と近代文学」(十三号、昭和四十七年十一月一日、有精堂発行) 掲載の拙論『森鷗外と革命』——大逆事件を中心として——、二二頁。
 - 13 「新潮」(第七十一卷第三号)、昭和四十九年三月一日) 掲載の柄谷行人『歴史と自然』——鷗外の歴史小説——、一三三頁。